

- (16) 弥富破摩雄氏『中島広足』
- (17) 全集第二編、道義編、『山跡古々呂』
- (18) 右同
- (19) 全集第二編、随筆編、一二七。
- (20) 天保十二年（一八四一）
- (21) 弘化二年（一八四五）
- (22) 「中島五郎兵衛隠居太郎儀国学之儀ニ付、長崎諏訪大宮司学校え招請」
（文政九年十一月）（兼清正徳氏『桂園派歌人群の形成』
付北岡文書）
- (23) 全集第一卷、文集編、『檀園文集拾遺』一六七。
- (24) 黒岩一郎氏『香川景樹の研究』
- (25) 『随聞随記』（桂園遺稿）
- (26) 黒岩一郎氏『香川景樹の研究』『桂園入門名簿』
- (27) 全集第一編、文集編、『檀園文集』（活版本）四九。
- (28) 全集第二編、随筆編四。
- (29) 全集第一編、紀行編二〇。
- (30) 全集第二編、随筆編、『檀園随筆』（板本下巻）一九〇。
- (31) 全集第二編。
- (32) 全集第一編、紀行編一八。
- (33) 美隆著『藤門雄記』
- (34) 『国学者伝記集成』
- (35) 木村三太郎氏『浪華の歌人』『国学者伝記集成』
- (36) 全集第一編、紀行編一八『初しぐれ』
- (37) 全集第二編、考証編。永章序歌、武藤陣亮序。板本にはないが、自筆稿
本に記されている。
- (38) 弥富浜雄氏編『名家書簡集抄』
- (39) 弥富破摩雄氏『近世国文学之研究』
- (40) 熊谷武至氏『類題和歌集私記』『鰻玉集編』
- (41) 前同書「柿園先生詠拔翠」
- (42) 肥前入、本居大平門。豊前小倉藩士、『古事記集解』『万葉長歌格』等の
著がある。文久三年攘夷の勅により下関で毛利氏が外艦と戦った時、小

中島広足の歌壇的地位について

- (43) 倉藩が勅に従わないのを怒って食を絶って死んだ。『国学者伝記集成』
浪華では門人二百人余（『国学者伝記集成』）といわれ、多くの歌人と接
触したと言われる。（『加納諸平の研究』）
- (44) 拙稿「近世末の新古今風について」（『早大国文学研究五十二集』）広足は
『鰻玉集』では二三首入集で順位四位。『千船集』では二八六首入集
順位四位。二集合計では五〇九首で最高入集数である。
- （著者 一般教養 昭和四十九年二月二十五日受理）

月十五日に北浜の家を長崎に向って出発した。

安政五年（一八五八）再び難波に来て暫く定住をしていた安政七年、再び多豆伎⁽³⁶⁾と旅をする。彼が本町の紀伊国屋に泊っているのを広足は訪れて、連立って旅へ出る。途中多豆伎宅で泊る。中重信を呼びにやるとやって来る。翌日多豆伎親子を連れて出発する。生駒山に登りその日は多豆伎の家に帰る。更にその翌日多豆伎と二人で立田川、竜田、法隆寺、薬師寺、更には奈良の古寺社に詣る。十月一日に多豆伎の家を出て四日の朝、木津川の堤で多豆伎と別れた。用事が多いというのを無理に大和へ連れて来たのであるから、今日は仕方がないと諦める。広足は一人で宇治から京都を回り七日に家に帰る。中西多豆伎とは余程うまが合ったらしい。

本居内遠は広足が天保六年に出した『歴木弁』⁽³⁷⁾を読んで、「読佐鳥歴志之考作詞」を広足に贈って、その中に「三栗の、中島の兄が、つばらにも、記せるふみに、聞わたる、さとの名しるく云々」と詠んでいる。広足は著書を大平や内遠に贈っていたので、この二人からも相当重んじられていたことが知られる。

大平門で『類題鴨川集』を編集した長沢伴雄は、嘉永四年（一八五二）七月に、広足の板本『敏鎌』に序文を書いて、

……かれ中島翁がこれの利鎌磨ぎ清めて茹そげまくほりするもげにさる事にて、二翁に嗣たる深切心とこそいふべかりけれ。あはれこれにならひて、ここにもかしこにも焼がまの利鎌磨ぎもたりて、からくさの醜草のおもひいづるごとに、かくざまにかりはらはましかば、その草根の下に朽入て、毒香も何もつひにはたえうせなんものぞかし。

と言っているし、伴雄から広足に送った書簡も残っている⁽³⁸⁾。一方、『類題鰻玉集』を編集した加納諸平から送った書簡があり、それは、『鰻玉集六編』の巻頭の歌に予定している「君が代の年の始の空みれば豊はた雲に朝日さす也」という自作の歌を誰か買う者がないかとい

う内容である。ところがこの歌は『鰻玉集』では浜武元興の作になっているからこの人が買ったことになるのである。この作品は「柿園先生詠拔翠」の中にある諸平の歌である。

浜武元興は明治五年没、長崎糸割符宿老をつとめ、景樹を師にした人である。このような内密なことを相談するほど、諸平と広足の関係は親密であったと考えられる。このように、橋守部、本居大平、伴信友、加納諸平、本居春庭、長沢伴雄の当時の大家や、青木永章、西田直養等長崎、熊本の歌人、学者から重んじられ、長崎歌壇・国学界の長老として、又浪華歌壇にも高い地位を保ったと考えてよいであろう。この事は類題和歌集に於る彼の地位からも考えられる。

註

- (1) 弥富破摩雄氏『中島広足』
- (2) 右同書
- (3) 広足の長崎転住は文政五年に檀園を作り、熊本との間を往復していたが、文政十年から国学教授として長期滞在になる。『中島広足』『檀園派歌人群の形成』
- (4) 中島広足全集第一編、紀行編五。
- (5) 全集第一編、文集編、『檀園文集拾遺』一八二。
- (6) 全集第一編、文集編、『檀園文集』（板本第一集）。五。
- (7) 全集第一編、文集編。
- (8) 全集第一編、紀行編八。
- (9) 右同一〇。
- (10) 右同九。
- (11) 右同一一。
- (12) 全集第一編、文集編、『檀園文集』（活版本）一五三、「船曳大滋墓誌」
- (13) 全集第二編、随筆編、『檀園随筆』（板本下巻）一九一。
- (14) 全集第一編、文集編、『檀園文集』（活版本）四七。
- (15) 加納諸平編。

書きよむる（ママ）いとまだになきよしなれど、こたびおのれらがせちにこへるまゝに」と書いていところを見ると、名声も上り、門人も多くなったようである。

前述「嘉永元年のしはすばかりにおもひし事」（『あまのくぐつ』）の中に、故人になった門人を次のように書いている。

（青木永章、近藤光輔没後）さて後はたゞひとり世にのこれること、ちして、いともく心ぼそくなむおぼゆるを、つくぐとおもひかへせばしたしきをしへ子ども、いとおほくうせぬる中にも、木谷忠英、伊藤常香は光輔につぎてやなくなりにつむ。高野興善、中村茂濟、道幸敦化など去年今年とうせ行ぬ。わかき人にては馬田永親、伊藤常城、船曳大滋など、これらはことに歌もよくよみつるをいともいともをしむべき人々になん。

これらは故人になった門人の主だった人々である。光輔、永章は友人であるが、

此外の人々はたゞをかしき歌どもさはなるを、さきに『瓊浦集』とてあつめ出しつるを、猶其後なるもかずつもれるはふたゝびえらぶべくおもひなりぬ。

この類題集の百数十人の歌人の中には、彼の門人が多くいることである。

その他、京都へ旅行した時果さなかつたが松尾社神司六人部是香を訪おうとした。知る仲であつた。（雲廻古呂母。⁽²⁹⁾安政七年）清水浜臣の高弟前田夏蔭から来た学問上の書状が二通「みつはくむの歌の事」の文中に引用されているが、夏蔭との交遊もあつた。海野遊翁が景樹に送った書簡を『櫛園随筆』（板本上巻）⁽³¹⁾に載せているのは好意を持ったからである。『しのすだれ』序文には遊翁との文通を記している。

安政四年（一八五七）に長崎から難波に、それより京都・奈良・吉野を回り、四月出発十月長崎着の大旅行をした時難波郊外の佐々木春雄を訪ねた。（『花の下ぶし二』⁽³²⁾）この人は加納諸平の門下で素封家で

あり、伴林光平の山陵調査費を出した人である。玉造の真田山社に詣り、

其あたりなる佐々木春雄をとふ。かねてせうそこしつればあるじまうけあり。ものがたり夜ふけて猫間川より舟にてかへりぬ

かなり親しい間柄であつた。奈良、京都を回つて一度難波に帰つたが、二十日ほど経つと今度は泊っている梅田村今井克復の家を、克復と昌盛を連れて、三里ほど東の喜里川村の中西多豆伎を訪ねる。

多豆伎は岩崎美隆の門下で、河内国中河内郡額田村墓地に住み中河内郡花園村の美隆の家で開かれた歌合⁽³³⁾には常に出席しており、従つて伴林光平とも同席している。文久四年、五五歳で没しているが、『類題鮫玉集』にもかなりの数が入集している。安政四年というところ、この年加納諸平が没し、美隆もそれ以前に没している。多豆伎は美隆の高弟だつたと思われるが、師の没後でもあり、広足に近づいていたのであろう。

此夜は多豆伎が家にやどりてなほ酒のみつゝ深夜郭公といふと歌を四首詠んでいる。広足は酒を好んだらしく、泊つた歌友の家々で酒を飲んだことを書いている。翌日は多豆伎も連れて大和見物に出掛ける。生駒山、立田川、法隆寺と河内から大和へ。それから又河内へ引返し応神、雄略の御陵を拝し、十日出発から三日目に大和川の堤で多豆伎に別れた。このように、多豆伎とは以前から知る間柄であつたらしい。

今井克復の家で泊っていたが閏五月十六日に北浜の家に移り住んだ。（『花の下ぶしに』）例の人が来て酒を飲んだという。五、六、七、八、九月の初めまで、毎月二、三回の歌会を家で開いている。難波で出る人の名は、今井克復、昌盛、中西多豆伎、安井一貞、尚克、尚古、川崎為一、大堀忠通、川崎直温、稲垣延親、中村元道、山口政直、多田為政などであるが、七月十八日の舟中での歌会には十七人集まつたと書いている。中村元道は広足を難波に招いた人だという。九

える人間同志でもあったためであろう。そして年齢の上では広足が一等後輩である。この二人の広足への影響も当然考えられるし、同時に、広足を推挽した人とも考えられる。もともと広足が長崎に來たのは青木永章の推挽によることであつた。光輔については、「夜雨庵歌集序」に

夜雨庵の翁なき人となりて今は廿年にも成ぬべし。此翁の歌よむ事にすぐれたりしは今さらいふべくもあらず。さるはこゝろことばをつくろひかざることをこのまず、たゞ打おもふまゝをよみ出られしかど、其心のみやびなりしまゝに歌のさまもおのづからはなやかになむ有ける。いとわかゝりし時は鈴屋大人に言とひ、後には千蔭翁、大平翁などにもみせて、くはへられしことども、このましき方にしたがひ、齡の末には景樹翁にもふみかよはしてよしあしのさだめをこはれけり。(中略) おのれ長崎にいたりしはじめより此翁と玉園翁とは誠のはらからの如くいとしくむつびかはして、歌の事どもかたみにあげつらひつるを玉園翁はことに長歌にひでられて、其集二巻はやくさくら木ににははしぬ。(安政七年)

と書き、前文にも、
近藤光輔は近き世にはいとすぐれたる歌ぐちにて、いひ出る歌ごとくに一ふしありてをかしく、すがた花やかになんありし。
とも書いている。光輔は宣長、千蔭、大平、景樹と流派を超えて教を乞うているので、この点だけでも、一般的に歌壇で知られていたであろう。桂園派にも入門したと言われているが、それぞれの師が没していったので、師の没後他の師に入門したと考えられる。この点につき広足は同じ歌集序に、

常のことぐさに、我歌はわれとはえらびがたし。かならず人にことわらすべしとて、たれとなくみせて其いふことどもをきかれけるなど、いゝさかもわたくしなくともさやけきなりけり。

と書いて、光輔が多くの師の、しかも主張の違う師に従つたことの理

由を説明している。景樹は光輔や、青木永章等の作品を新古今調が強⁽²⁵⁾いと言つて非難しているが、光輔の考えでは、入門してもその派に心酔するのではなく、批判を乞うて、自己の足りない点を補い、自己の作品を高めるのが目的であつたことが、広足の序文で知られる。広足⁽²⁶⁾も入門したことは間違いないが、景樹の主張に心酔したのではなく、景樹の和歌の優秀さを認めながら、彼に批判的であつたことは後に説くが、本意は光輔と同じであつたと考えられる。そして入門していたのも景樹在世時代だけで、景樹没後も桂園派の人々に交つたという形跡はないから、入門は一時的であつたと考えられる。青木永章もやはり同じであつただろう。

四

彼の交友者として名のある者をなお挙げると、小倉付近の富野村に住んでいる西田直養である。安政四年遥々と大阪から吉野へ旅する「花のしたぶし」という紀行文の中に、この人を訪う記事がある。又、その途中周防の宮市で鈴木高輅の家で泊っている。この人は『玉石集』⁽²⁷⁾という類題和歌集を編集しており、広足は嘉永元年九月二十日に序文を書いている。その序文によると、自分も以前から西国の歌を集めて「つくし歌」という名を付けておいたが、それでは全国には広がらないだろうから、『鰻玉集』『鴨河集』のように全国のを集めたいと思つていたところ、鈴木高輅から自分の歌、長崎の人の歌、その他西国の歌を送つて欲しいと言つて來たので、集めていた歌も全部送つたというのである。この人は広足の門人であつて、広足の『櫛園隨筆』の序文を書いている。

この序文で、高輅は「その翁学の道にはいたらぬくまなく、その名四方にかくれなき翁になん」(嘉永四年冬)(一八五一)と言ひ、嘉永二年(五八歳)の『海人のくゞつ』では肥後の門人小山川蔭が跋文で「大人はた今は、こなたかなた物まなぶ人のいと多かるに、かずく

と広足が書いていることによると、信友が晩年京都に来てからのことで、広足の請いにより「比古婆衣」の原稿を貸してくれた時に付けてあった手紙に文を添えて欲しいと書いてあったのである。その頃から三十年前というと広足二二、三歳であるから、藩士として江戸へ往来していた頃であろう、広足は信友を訪ねた。広足は言う。翁の著書は他人を攻撃するでもなく、他人の研究を取るのでもなく、自身の研究の成果であるという。そして信友との関係を

かれ、おのれはやくより、兄とおもひたのみてことかよはしゝを、翁はた弟とおもひなして、この説はいかにもおふぞ、かゝる事は、そこによき考はなきかなどゝ心へだてずいひおこせられて、またなくむつたまあへりしは此翁になむ有ける。

と言う。そこで序文を書いて送ろうとしている時に翁が没せられた。

いま二巻を選び終えられたので父の書を次々と出版せられる息子信近殿へ言つてやったら、是非序文を書いて欲しいとのこと書いていたというのである。これで見ると、信友も随分広足を信頼していたことが知られる。

『鰻玉集』第三編に次の歌がある。

平田篤胤にはじめて逢けるとき西の国にていにしへ学びをひろむ
べきはそこをたのみにもおもふなりといへりけるに

苗代のたのもしきとおもふらんすたり蛙の力なき身を

江戸に上つて篤胤を訪うたのは天保元年（一八三〇）九月、三九歳の時だという。一柳千古が病んでおり、その見舞かたがたであるか、江戸に上り翌年四月に熊本に帰り、千古は翌三年に没した。篤胤も彼を信頼して古学の同志としてしようと考えたのである。

青年時代熊本藩士として江戸に在住したので、歌壇や国学界の人にも接触し、彼の名を知る人も多かったのである。文政二年（一八一九）二月に、彼は「山跡古々呂」という文章を書いた。その末尾に「かくあげつらふもおのが新説にはあらず。すべて県居大人、本居翁

の靈によりて古の意をさとりえて、いへる也」と書いている。これは広足二八歳の青年時代の著作で、稿本のまま伝わったものであるが、それには長瀬真幸と城戸千楯の二通の書簡が添えられていた。千楯は京都で出版を営んでいたが、宣長の門下である。千楯のは次のようなものである。

一筆啓上仕候。追々暑氣相増候処、益御壮栄被成御座奉賀候。誠に先日は御上京始て得貴意奉大悦候。其後御入来被下候処、他行不得貴意、奉残心候。然は御恵の二小冊の内、詠歌論御持帰りの由承知仕候。やまとごゝろの方、本居翁御写取在之候に付隙取申候。此方御返上仕候。御入手可被下候。本居翁当十七日御帰国に御座候。貴家様へも宜敷申上候様被申付候。長瀬翁御出会御座候はゞ宜敷被仰上可被下候。

先は右申上度早々如此御座候。尚御上京の節復々御立寄奉待候。恐惶謹言。

五月廿日

城戸市左衛門

中島君

これによると千楯に著書を送って読んでもらい、上京の節訪ねている。本居翁は太平であろう。翁は「やまとごころ」を写したという。

長崎在住の時の交遊歌人について、「嘉永元年のしはすばかりにおもひし事」の中に、次のように書いている。

おのれ長崎に旅居せしはじめより、歌よむ人はたれとなくしたしくまじらひし中に、青木永章、近藤光輔のふたりは、ことに隔てなく、まことのほらからのやうにむつびかはしゝを、光輔は八年ばかりさきに六十一にて身まかり、永章は四とせさきに五十九にしてなき人となりぬ。

永章、光輔とは真の兄弟のように交わったというが、三人共に県居、鈴屋派の同系統の歌人であったためもあるうし、お互に信頼し合

と書いている。橘という人は門人であろうが、天保十年（一八三九）頃の広足の位置が知られる資料である。橘守部とは青木永章を介して親しくなり、船曳大滋という門下を江戸にやって守部の門に入らせた程である。大滋は一時長崎に帰って天保十年正月に広足の『檀園歌集』の跋を書き、これによると彼が出版の仕事をしたのである。又、『檀園長歌集』には天保十年八月に序文を書いている。彼は再び守部の許にゆき弘化四年に長崎に一時帰国した時から病気になるこの年十月四日に没した。

守部とはそのような親しい仲であったが、広足には厳しい学問的信念があつて、その面では許さないものがあつた。『檀園隨筆』（板本下巻）の「橘守部説」に、守部が、守部著『稜威道別』五巻に、宣長が『髯華山蔭』の中で伊勢外宮書の説を非難した説を、強いて曲解して宣長を攻撃しているとして抗議している。

守部が鈴屋翁を誂れるは此類の事多く、たえてなき事を作りいで、翁の説となして、みだりにいひくたせるもの也。さるは道別のみならず外の書にもいと多かるを、そは又おのれ別に弁へあきらめて、翁のなき名をすゝがんとす。

（守部は吾友青木永章がいとしたくせしかば、おのれも其たよりにて、文かよはしなどせし事もありて、よき説はもとよりとり用ふれど、かゝる強言どもはえしも見過しがなければかつゝ論はんとする也）

と書いている。この隨筆は嘉永四年冬に門人の鈴木高輅が序文を書いているが、この文が何年頃書かれたかは分らない。又、同書の「みつはくむの歌の事」という考証の中に、清水浜臣門の前田夏蔭からの消息文、

先師清水浜臣、壮年の頃、考得候齟齬考、泊泊難考中に相記候。然に近比、橘守部とか申候者、隨筆中に右之考引書、其外考説之詞聊も不違記出候者、共暗合にも可有候へども余り奇異之事に人々申合

候云々。

とそのままだに掲げ、此の守部の説は『山彦冊子』に出ていて全く同じなのでここには挙げないと書いている。守部は当時事々に宣長に反抗した学者で、夏蔭の書き方からも、県居、鈴屋派からはよく思われていないことが窺われるがこれは当然であろう。

三

伴信友が没したのは弘化三年（一八四六）で、広足は五五歳である。嘉永三年（一八五〇）正月望日の日付で『檀園文集』（活版本）に「比古婆衣のはしふみ」という文章を載せている。相当長い文章なのでそのあら筋を書くのと次のようである。

伴翁から先年言つてこられたことには、年来考えて来たことを書き集めて「比古婆衣」という名を付けた。それは先年一、二巻お見せしたようなものだ。それについて、強いてという訳ではないが、何か一寸した言葉でも添えてやろうと思われたら、何となく思い浮べなかつた事を少しばかり書いて頂ければ有難い。それかと言って、いま流行の賛辞などは欲しくない。ただ思われた通りの事を書いて戴きたいと言う。そして、

「まことや、かの肥後国よりはるゝ大江戸に來りて、わがすみかを問ひたまひしは、今は三十とせにもなりぬべし。かたみにおもふことゞもかたらひそめてより、いともゝしたしくことゝひかはしゝを、近きころは京にのぼて（り？）ゐて、もろこしにちかき長崎の津よりちかどりの如く、ふみかよはし、ことゞひ聞ゆることのおもひもかけぬよろこびのかぎり、さらにいひつくしがたくおぼゆるを猶一くだりものしたまはゞ、うれしくこそは侍らめ」などありしは、此ひこばえのふみのいともゝ見まほしくて、ねもごろにこひつるに、はるけきさかひをいとはず、かしのせられける其のたよりにつけていひおこせられたるなりけり。

者が多くなつて盛んになり、また、歌の風も変つたという。以前は近世風の弱々しいものであったが、現在の歌風は、古風で調べ高く、雄渾なものが多くなつたといひ、それは広足大人の指導によるものだという。

この歌風というと、それは万葉調ということになるであらう。この時は既に広足の『檀園歌集』が出ているのであるから、それも万葉調だということになるが、この歌集の作品は従来の所謂万葉調とは言われない。その問題は後のことにするが、広足が、学問の上でも和歌の上でも、長崎歌壇の進展に寄与したことを認めているのである。

これは文政九年三月のことで、まだ三五歳の年であるが、「とこよぢの日記」の中に、長崎から熊本に帰る旅で、守山という処へ行く途中の家で休んだが、その妻女が言つたこととして、

肥後には長瀬翁、春臣ぬしなどのし給ふよし、此三里ばかり東平村なる植木神主は其ぬしのをしへ子なるを、ちかごろは、其ぬしも長さきにもせらるゝよし、おなじ里なる松本富久かたり侍りき。

此道よぎり給ふをりもあらばいかでとめ侍りてと、あるじもつねにまちこひ侍るなり。

と書き、それを聞いておかしく思ったが、私とその春臣だともいえないので短歌を一首書いて置くと、名を聞きたいというが、神主が知っているだろうと言って立去る。この里から程遠くない処に門下の松本富久がいて、そこへ寄るが留守であつた。この頃でもこの地方では名が知られていたようである。

文政十一年八月九日の夜、折から長崎から熊本への航海の旅をしてゐた広足は大暴風に遭ひ、持参してゐた原稿などすべて失なつて命だけ危うく助かつた事件があつて、その記録が「樺島浪風記上・下」である。事件も大変な事件であつたが、文章も迫真の力がある。下の方は後に天保四年正月に書いたものであるが、下の最後に、
浪風記拝見。かへすぐめづらかなるそのをりの事見るが如く、お

そろしくおぼえ侍り。 大平

という大平の書簡の一部が添えられている。『檀園文集（板本第一集）』の「藤垣内翁追悼歌之序」の中に、広足は永章につき、

かれ此里なる青木永章ぬしもはやくより其をしへをうけて、まなびの道にいそしきこゝろより……

と書いているように、永章は古くからの大平の門下であり、近藤光輔も春庭の門下であつた。この二人のどちらからか「浪風記」を大平に見せたのではなからうか。また、同じ『檀園文集』の末尾に、本居大平と、橘守部の書簡の一部が再録されている。大平のは、

して、大平は深く心入たるにて大に自己の心に叶ひ、自身はほこり珍重に思ふ歌也。御ついでもあらば此書付そへて、青木氏にも広足子にも御見せ可被下候。まさや、此節はじめて、ひろたり子の文章見申候。さてくよくかくれ候事感心いたし候。だんく後世は英才の出くる事に御座候。（原文のまま）

と広足の文章を称揚しているが、何の文章であるかは分らない。橘かずひらの注記によると、これは昔大平翁が近藤光輔に送つた書簡の末尾であるという。又橘守部のは、

再三頂戴奉多謝候。又、檀園集三冊、不知火考一冊、歴木考一冊被贈下、是又難有さてく檀園大人学といひ御風流と申し、不堪慕候。殊更御歌之御手際御秀絶、当今江戸にはケ斗之人、耆人も無御坐候。

と広足を称揚している。これも橘かずひらの注記によると青木永章に送つたものである。永章は守部と親しい仲であつて、そのために広足の歌集には永章と守部が序文を書いている。なお、橘かずひらは注記の中に、

わが檀園大人ひなにすまれて、其名はひろからねど猶しる人ぞしるとか。此名だゝる翁たちのほめられたることばの花、△しからぬを、わがどちにしらせまほしくてくゝにうつし出づるになむ。

一柳大人のもとに、大江戸に物学にもおもとひ立ぬるも、はるけき道に、おもひたゆたひて、心のうちにのみにしへにけるを、去年の秋におもひおこしつる。又さはらふことありてとゞまりぬ。さて此春を過しなば又いつかはと、しひておもひたつは二月の末つかたになん。

と書いているが、瀬戸内海に出る鶴崎、三佐の湊で便船を得られず空しく引返した。文政六年、三二歳の年で、熊本に帰っていた時である。入門は二〇歳の頃であるから、更に学問するために訪ねようとしたのである。

二人目の師長瀬真幸については、

年をかぞへてなき人のあととへるはふるくより有ける事なめり。わが師長瀬大人世をさり給ひてより廿とせあまり五年に成ぬるを……

(長瀬翁廿五回忌追悼歌巻のおくがき)

又、「田盧歌集跋」に、

長瀬大人……京にまうのぼりてたかき家々のつたへごとをうかゞひ、伊勢にゆきて故鈴屋翁のをしへをうけ、江門にいで、芳宜園、にしごりのやの翁たちにまじらひ、明くれにいにしへの事をあげつらひ、あきらめられけり。かれ年をへずして学の業なれりしかば国にかへりて、おなじ心の人々をいざなひをしへられぬ。今かくわが国にいにしへ学のさかりなるは、またく此大人のみちびきのいさをにて、吾国にてはこの道のおやともおやとたゞふべき大人になんありける。

と書いている。長瀬真幸は宣長の直門であり、千蔭や春海とも交わっているから、系統は明らかである。だから、広足は、江戸派と鈴屋派の系統を受けている人である。

天保十年三月は、広足の『檀園歌集』が出版された翌月であり、彼は四八歳である。この月に、長崎の門人木谷忠英が、『檀園文集』(板本第一集)の序文に、広足の功績を次のように書いている。

長崎の里にいにしへ学のおこりそめぬるはいとも近き世のことにて、たゞひとり、ふたりのみなりしを、わが檀園大人ものせられしより、こゝろをふかめてまなぶ人おほく成きつゝ今しもいとさかりにはなりにたり。されば歌のまなびも、はやくのは、たゞかの近き世ぶりのめゝしきのみなりしを、今はいにしへのたかきしらべの、をゝしきさまをよみ出る人多く、長歌・文詞などめでたくつくり出る人のあめるは、またく大人のみちびきのいさをになむありける。かくて大人の歌のすぐれたることは、今さらにいふべくもあらず。さきにあらはされたるながき、みじかきうたどもの集を見てもしるべきなり。

木谷忠英は、文政七年秋の「夢路日記」に、

九日。大宮のまへなる神わざどもは去年見つればさしもいそがれず。日たけて忠英がりゆきてわたるを見る。

とある。これは熊本から長崎諏訪社の祭見物をした時の事である。社の宮司は親友の青木永章である。又、文政十年、三六歳の時の「檀園紀行。付録・瓊廼浦つと」に、

肥前国高来郡田結浦なるなにがしの寺の観音はいとふるき御かたにて、いみじきねぎごとのしるしおはしませばとて、此長崎の里人のつねにまうづる所なるを、木谷忠英、其家とじ、娘など願はたしにとおもひたつを、おのれも浦ぜうえうしがてらいでたちなんやとそゝのかすに、此ごろ久しく旅のやどりにこもりあつれば、めづらしからん海山のたゞずまひもゆかしうて、三月十七日のあけぼのよりとさだめぬ。

これで見ると、忠英は広足が長崎に移って間もなく入門した門人らしく、また、家族とも親交を持っていた親しい門人と思われる。そのような門人であるから、その師を称揚するのは当然であるが、出版される書に書くのであるから、余り誇張することは許されないであろう。故に、この序を信ずるとすれば、広足が長崎に來たために古学を学ぶ

中島広足の歌壇的地位について

——近世後期歌壇史の一面——

辻 森 秀 英

一
歌壇的地位というならば、広足が住んでいた時代の歌壇がどんなものであったかを先ず概観しなければならぬであろう。広足は寛政四年（一七九二）に熊本で生れたのであるから、二四歳は文化十二年（一八一五）の年で、この年病気のため熊本藩の小姓、二百石の勤めを辞した。

文化四年、十六歳で初めて江戸詰めになり同八年まで、江戸と熊本を往来した。この時代は江戸が修業地であった。先輩の同藩士本間素当に続いて入門したのか、二〇歳（文化八年）前後に橘千蔭の門人——柳千古の門に入った。

千蔭は文化五年（一八〇八）に、村田春海は文化八年（一八一二）に没し、この年、香川景樹が『新学異見』を書いて、反県居派の主張を明らかにする。広足の青年時代は県居江戸派の転換期と、京都に於ける景樹の桂園派の興隆期に当る。また、鈴屋派では宣長の後継者本居大平が紀伊和歌山で、伊勢では内遠が宣長の学説を継いでいた。

広足は辞職後も江戸に上る機会（天保元年）があるが、熊本では宣長門の長瀬真幸の門下にもなった。隠居の身になっていた彼は、文政五年（一八二二）三二歳の年に長崎に移り、檀園と名付ける居を構える。この地で歌人青木永章、近藤光輔と親交を結び、長崎歌壇といふべきものを形成する。毎年郷里熊本へ帰省しているが、長崎での生活

は安政五年（一八五八）六七歳まで三七年に及び、歌人として学者としての活動期の大部分を過している。

この時代、天保三年（一八三二）に師の一柳千古に死別し、天保四年に本居大平が没するが、天保六年にはもう一人の師長瀬真幸の死に遭う。天保十年（一八三九）四八歳の年に第一歌集『檀園歌集』を出版する。門人たちが出版したと書いてあるが、近世歌人としては生前、それも中年時代に出版したのは例が少ない。幸運の人である。天保十二年に先輩本間素当と親友の近藤光輔が没し、天保十四年には桂園派総帥の香川景樹が死没した。広足は光輔と共に景樹に入門したこともあるが、景樹が七六歳で没した時、広足五二歳である。弘化二年（一八四五）親友青木永章没し、翌三年には親交のあった伴信友が没する。

嘉永元年（一八四八）五七歳で第二歌集『しのすだれ』第一集を広足の息子広徳が長崎山形屋清兵衛から出版した。安政五年（一八五八）六七歳で大阪に移住し北浜に住んだ。文久二年（一八六二）七十一歳まで住んで、この年熊本に帰り、時習館国学和歌教授となり元治元年（一八六四）七三歳で熊本で没する。

二
紀行文「ふなぢのなやみ」に広足は、